

紙本着色
虎の図
双幅

新年にあたって

館長 大城 立裕

昭和61年の新年を迎えるにあたって、ご挨拶を申し上げます。

昭和60年にも、いろいろの思い出があります。おもなイベントとしては、大嶺コレクション寄贈の受入れと整理、九州博物館協会の総会の開催、グスク展、具志堅聖児先生からの日本画寄贈の受入れ、稲垣国三郎先生遺品の遺族からの寄贈の受入れなどです。

なかでも、グスク展は盛況でした。展示とシンポジウムをふくめて、沖縄の人たちは民族のルーツにたいする興味で目を輝かし、県外からの観光客は、沖縄の独特な文化と歴史にたいして関心をよせてくださり、博物館の使命がどこにあるかを如実に物語る風景でした。

九州博物館協会の総会は、沖縄県博物館協議会

の協力を得て、当番県としての責務をはたすことができましたが、そこでの大きなトピックがコンピューターによる資料の整理にわが館が着手したということにあっただけに、これからのわが館の責任は大きいといわなければなりません。自覚したいと思います。

沖縄県博物館協議会の研修会は久米島で開催し、たいへん成功したと考えています。新しい博物館や資料館の建設をめぐる、シンポジウム形式で議論したのですが、かつてない迫力で、県下における博物館にたいする関心のたかさのほどを思わせるものでした。

新しい年は、昭和62年に開催される国体の準備をはじめの年です。スポーツ芸術という名で、博物館の展示がイベントになります。内外に博物館にたいする期待が大きいことにかんがみ、努力したいと思います。県民のみなさんのご批判とご協力をお願いします。

特別展「グスク」

—グスクが語る古代琉球の歴史とロマン—

去る11月1日(金)から12月1日(日)までの約1月間、当館で特別展「グスク」が沖縄タイムス社との共催で開催された。

近年、本県ではグスクの発掘調査が活発に行われ、多くの成果をあげつつある。とくに首里城跡をはじめ今帰仁・南山・浦添・勝連城跡など沖縄の代表的なグスクの発掘調査がなされ、多くの県民の関心を集めている。

このような考古学を中心としたグスク研究の成果をより多くの人に展示公開する目的でこの特別展が開催されることとなった。また北は奄美諸島から南は八重山諸島に至る地域のグスクを総括した展示は今回がはじめてである。

展示内容は【人類の登場からグスクまで】…沖縄に人類が登場した約3万2千年前から12世紀末のグスクが発生するまでを出土遺物をとおして概観した【発生期のグスク】…恩納村熱田貝塚や西原町我謝遺跡など12～13世紀の遺跡の出土品を展示【発展期のグスク】…屋良グスク・



北谷グスクなどの発掘成果を展示【宮古・八重山諸島のグスク】…先島諸島のグスクの特徴とその出土遺物を展示【奄美諸島のグスク】…奄美諸島のグスクの特徴と各グスクからの出土遺物を展示・特にカムイヤキ古窯跡出土の須恵器30点余はグスク展の目玉となった【グスクとは】…グスクについてのいろいろな考え方やグスク論争について解説【大交易時代のグスク】…このコーナーでは今帰仁・南山・浦添・勝連・首里城跡など沖縄の中心的なグスクから出土した中国・韓国・タイ・ベトナム・日本など周辺諸国からの交易品を中心に展示し14～16世紀の大交易時代のような出土遺物をとおして、理解できるように展示した。その他【グスクのかたち】、【オモロとグスク】、【組踊とグスク】など考古学以外の分野からさまざまなグスクの在りかたについてパネルなどで図式化してしめした。

展示期間中の入館者は17,912人であった。最終日の2日間で3千人を越す入館者があり好評であった。日曜日は団体よりも親子づれの見学者が多くグスクにたいする関心のたかまりを感じた。

この特別展に関連して11月2日(日)「グスクシンポジウム」をBCホールでおこなったが超満員の盛況であった。博物館文化講座「南部のグスクめぐり」を計画したところこれも応募者が多く、結局2回に分けて実施した。

「グスク」展の移動展を希望する館が多くあり61年度には八重山と宮古で規模を縮小して実施することになった。

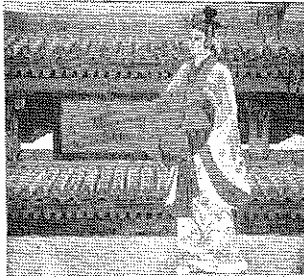


日本画20点寄贈される

—日本画家の具志堅聖児さん—



朝市



琉装

本土で日本画家として活躍している沖縄県出身の具志堅聖児さん(77)「東京都大田区在」が沖縄の日本画に少しでも役立ててほしいと、作品20点を寄贈された。寄贈された作品は日展入選作品や日月社入選作品で、大きさも油絵でいえば100号以上の大作ばかり。

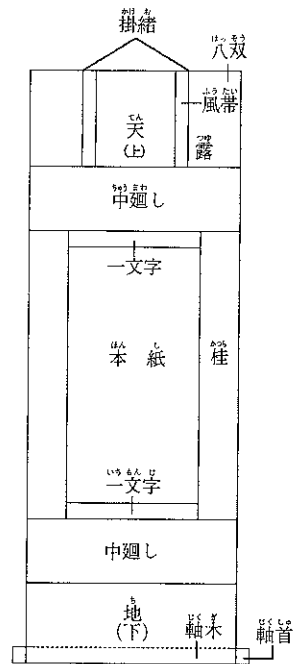
具志堅さんは那覇市出身。昭和2年上京し、芸術会院会員伊藤深水、佐藤太清に師事し、現在日展会友・日本美術家連盟会員。作品は「島のみやらび」、「琉装」、「朝市」など沖縄の市場や壺屋をモチーフに描いており、どれもが昔なつかしい風景である。

研究室より

収蔵資料見学のポイント

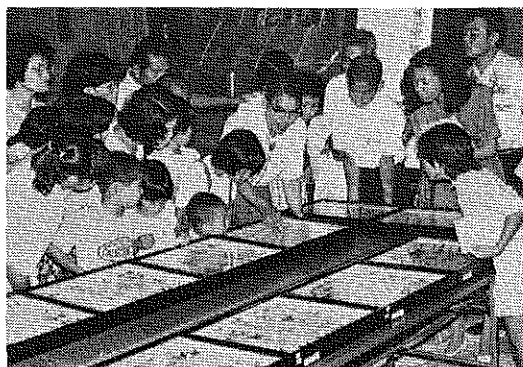
—掛幅装—

掛幅装というのは、書画やその他のものを装丁したときの形状の一つであり、そのほかには巻物(卷子)・屏風・襖・額・冊子などがある。掛幅装は中国から伝来したものであるが、日本に導入されて大きく発達した。掛幅装には、大きく分けて「文人表具」と「大和表具」とがある。前者の代表的な形式が明朝仕立と呼ばれるものであり、後者の代表的なものは本仕立である。両者ともいくつかの形式に分かれ、目的に応じた表具で仕立てられる。文人表具と大和表具の見分けかたは、まず風帯があるかないかを確認、あれば大和表具である。天・地は大和表具特有のもので、天・地に分かれてなければ文人表とみてよい。また、文人表具には本紙を縁取りしたスジ(細金)と呼ぶものがある。つぎに大和表具様式が古いかどうかを判断するには、天・地が2:1の比率であるとか、風帯の位置が均等になっていれば古い方式であると考えてよい。



掛幅装の各部名称

盛況だった文化講座スナップ集



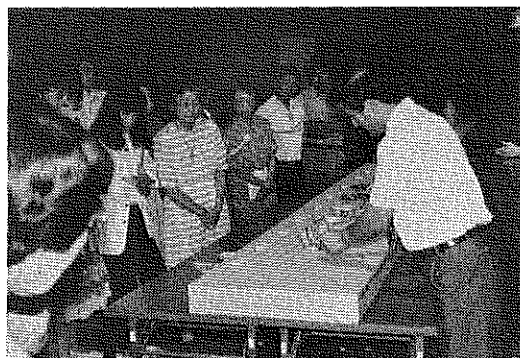
昆虫標本解説会



拓本教室



紅型教室



陶器解説会

紅型教室に参加して

南風原中学校一年 池宮城秀美

夏休みの三日間を利用しての博物館文化講座の「紅型教室」に参加しました。講師は、藤村紅型工場の藤村玲子先生でした。

小学校の時に、型染をやったことがあるので、今回は「筒描き」と聞いたので、どういったものだろうと興味をわいてきました。下絵の上に糊をつけて作るそうです。説明を聞いていると、むずかしい感じがしましたが、やってみると意外と簡単でした。

一日目は下絵書き、糊引き、二日目は色差し、生地染め、三日目は水洗いと乾燥で、できあがりです。私が一番頭を痛めたことは、なかなか糊が

うまく引けなくて、とてもこまったことです。でも完成すると、私が想像していたより、りっぱな作品ができて、とてもうれしくなりました。

最近、紅型の作品を見るたびに、「型染」「筒描き」の区別が、少しだけつくようになりました。この教室に参加し、勉強したおかげで、沖縄の伝統工芸の一つ「紅型」を少しだけ、分かるようになり、うれしく思っています。

九州博物館協議会の総会開かれる

昭和59、60年度の九州博物館協議会の会長が本県にあたりこの二年間の会長が大城立裕館長、事務局を当館が引き受けることになった。その理事会が60年5月24日、総会が25日に那覇市内の沖縄郵便貯金会館で行われた。以下はその概要である。

【理事会】 24日午前10時大城立裕会長以下役員11名、事務局3名が出席、59年度の事業、会計決算等の報告があり、続いて60年度の予算案、総会提出議題、時期総会研修会についての審議さらに会員および役員異動の報告が行われた。

【総会及び現地研修】 翌日25日は午後1時から32館56名が出席し、第25回総会が開かれた。大城会長、沖縄県教育長の挨拶の後議事に入った。事務局から59年度決算報告、監査報告があり、無事承認された。続いて役員・会員異動、60年度事業報告と予算案が提議され原案通り承認され、次期総会は熊本県、研修会は宮崎県に決定した。



協議題は

1、博物館活動とコンピューターの利用について
……（沖縄県）

【答え】 九州各県の館園ともコンピューターでの業務経験がないので、すでに導入している国等の施設から習うこと。

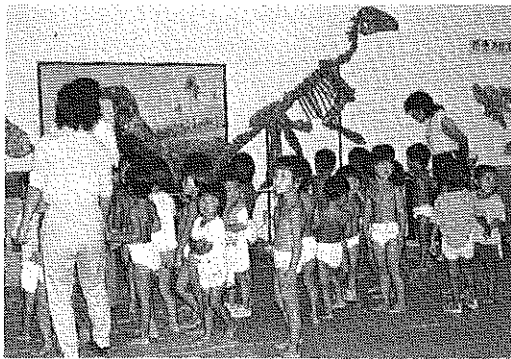
2、各館園の本年度の催し物（開催計画、展覧会）等について知りたい ……（長崎県）

【答え】 各県の幹事館でまとめて事務局に報告し、さらに事務局がまとめて各幹事館におくればあとは各県で傘下の館園に通知すること以上のことがスムーズに行われ無事大会は修了した。

第9回移動博物館が催さる

会期：昭和60年6月8日（土）～9日（日）

会場：伊是名村離島振興総合センター



離島や遠隔地の県民の要望にこたえる形ではじめた「移動博物館」も今日で9回を数える。今回は、伊是名村、同教育委員会の協力のもとに実施した。

同島は、尚王家発祥地として、歴史、文化の関心が高く、一般村民の見学が多く、また伊是名中学校107人、伊是名小学校173人が団体見学した。

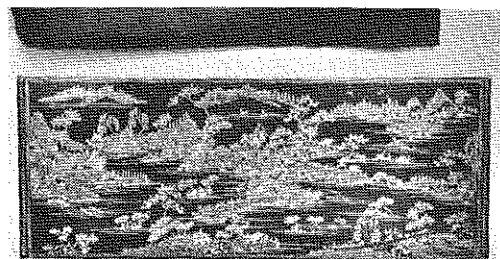
初日の8日は、午前9時から開会式があり、引き続き関係者によるテープカットが行われた。午後4時から、中学校体育館に、400人近い聴衆を集めて講演会が催された。テーマは、高良倉吉（沖縄史料編集所専門員）「伊是名からみた沖縄の歴史」大城立裕当館々長「沖縄人の生きかた」

展示品は、自然、美術工芸、歴史・民俗の各分野から展示したほか、戦前の沖縄の風物、建造物の写真展も併催し、人気をあっめた。

ご案内

特別展 大嶺薫コレクション展

——美術工芸の美を求めて——



黒漆山水楼閣人物螺鈿机、(上) 同天板

昭和59年財団法人・大嶺薫美術館が解散するにあたり、3,000点余りの資料が当館に寄贈されました。大嶺薫コレクションは美術工芸、歴史、民俗、考古等の各分野にまたがり沖縄をはじめとして中国、日本、そして東南アジア諸国のものまで広がっています。これらの資料をできるだけ多く展示し、広く県民に紹介するため特別展を開催することになりました。

期間：昭和61年2月18日～3月16日
 場所：2階ロビーと第3展示室（美術工芸室）
 主な展示物：陶器～抱瓶、嘉瓶、渡名喜瓶、
 その他南蛮壺など
 漆器～黒漆山水楼閣人物螺鈿机、
 その他中国・日本の漆器
 絵画～手籠盛花図、
 その他中国の絵画など
 書跡～県指定「程順則の書」
 その他、歴史、民俗、考古
 資料を展示します。

★博物館資料寄贈者名簿（敬称略）

（昭和60年4月～12月）

数多くの方々から、貴重な資料を寄贈していただきました。博物館資料として、たいせつに保存し活用させていただきます。今後とも本館の充実のために御協力下さいますようお願い申し上げます。

【歴史】 吉戸 直（豊見城按司より福昌寺宛書状・那覇市）、トム・オーシロ（大正14年の沖縄県管内地図・カリフォルニア州）、奥浜真昌（訓蒙日本外史・17冊・那覇市）

【美術工芸】

長嶺憲一（彫刻・眠り龍・豊見城村）、具志堅聖児（日本画20点・東京都）、与那嶺清（二十四孝図 三副対・座間味村）、吉戸 直（朱漆双龍彫刻吉祥文螺鈿小卓・黒漆玉取獅子吉祥文螺鈿八角針・那覇市）、屋富祖スエ（絹緋地格子袷着物、麻コージャー地総絁着物・那覇市）

沖縄県立博物館だより No.24

発行年月日 昭和61年1月20日

編集・発行 沖縄県立博物館

住 所 〒903 那覇市首里大中町1-1

☎0988-86-4353

84-2243